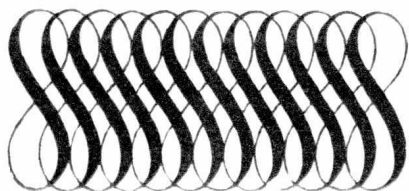
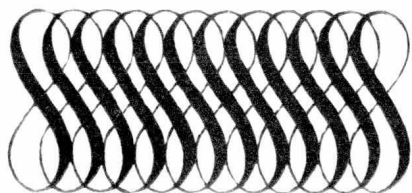


黒猫/モルグ街の殺人  
アッシャー家の崩壊/他

松村達雄訳



世界文学全集

8

河出書房



© 1971

Illustrations © by Harry Clarke

世界文学全集 8

ホ

1

昭和40年3月8日初版発行  
昭和46年3月1日17版発行

定価 六八〇円

訳者 松村達雄

発行者 中島隆之

印刷者 多田 基

装幀者 亀倉雄策

印刷 多田印刷株式会社

製本 中西製本印刷株式会社

本文用紙 国策パルプ工業株式会社

同納入 東邦紙業株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

同納入 株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区株式  
神田小川町三の六会社  
河出書房新社

電話 東京 (292) 大代表三七二一・振替口座東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

397-311308-0961

ポ  
ー  
傑  
作  
集



## ウィリアム・ウィルソン

なにとやいわん？ わが行く手に立ちはだかる亡霊  
この「いかめしき良心」をなにとやいわん？

——W・チェインバレン「フアロニダ」

わたしの名は、かりにしばらくは、ウィリアム・ウィルソンとしておこう。いま目の前におかれたこの真っ白な紙を、なにもわたしの実名で汚すにもあたるまい。この名は、すでにあまりにもわが同胞たちの嘲笑——恐怖——いな、嫌悪の的となってきた。怒りに燃える風評は、この名にとってもなう比類ない恥辱を、世界の果てまでも伝えひろめてしまったではないか。だれひとりとして顧みる者もない、追放者中の追放者よ！ この世界——その数々の榮譽、その幸福、その輝かしい希望に対しては、なんじはもはや永遠に死者同然となり果てたではないか——濃い、陰うつな、はてしない暗雲が、なんじの希望と天国とのあいだに永遠にたれこめたではないか。

いいようもない悲惨と許すべからざる罪にみちたわたしの

後年については、できるならば、ここに、また今日、書きしるしたくはない。この時期——わたしの後年——は、にわかになにわたしの背徳の度を高めたのであるが、その根源はどこにあったか、今はただそれのみを考えてみたいと思う。人間は通例徐々に墮落してゆくものである。ところがわたしの場合、アツというまに、あらゆる美德がまるで外套のずり落ちるように、ごっそり抜け落ちてしまった。比較的とするにも足りぬ邪悪さから、一足とびに、巨人がまたぎするように、エラガバラスにもまさる極悪非道へとわたしはとび込んだ。さて、それではどんな機会が——どんなただ一つの事件が、かかる不幸を招来したか、わたしの物語るところにしばらく耳を貸していただきたい。「死」は刻々と迫ってくる。そして「死」の先驅をなす暗影は、すでにわたしの魂を和ませている。死のかげの谷をゆくにあたって、わたしは同胞たちの同情を——むしろ憐憫を、ときえ言いたい——切望している。ある程度までは、人間業ではどうにもならぬ境遇の奴隷となったのだ、と人々に信じてもらいたいのだ。これからくわしく述べようとする事柄の中に、過誤ばかりにみちた砂漠の中に、何かささやかなオアシスを——所詮は宿命のなせる業、というささやかな救いをわたしのために見つけ出してほしいのだ。そしてまた、これくらいの誘惑はあるいはこれまでも存在したかも知れないが、しかし少なくとも、人がこん

なふうに誘惑されたことはいまだかつてなかった、たしかにこんなふうに墮落におち込んだことはけつてなかった、と人々からみとめてもらいたいのだ。いや、おそろくきつとそうみとめずにはいられぬことであろうが。かくまで苦しんだ人間がこれまでなかったのも、またそれなればこそであろうか。じっさい、夢の中にわたしは生きてきたのではなからうか。そして、この世のあらゆる妄想の中でも最も荒唐無稽な恐怖と謎の犠牲となつて、まさに死んでゆくうとしてゐるのではないか。

このわたしは、想像力に富み、たやすく激しやすい氣質をもつていつもきこえていたある一族の子孫である。まだほんの幼いころから、わたしは、この先祖代々の氣質をそのまま受けついでいることをはっきり示していた。年を重ねるにつれて、この氣質はますますつのつていつて、いろいろな理由から、友人たちの非常な不安の種となり、またたしかにわが身を傷つける原因ともなつた。わたしはわがままになり、とてもない気まぐれにふけり、まったく手に負えぬ激情の犠牲となつた。両親は弱い気性で、わたし同様虚弱な体質だったので、このわたしの性格的な悪癖をほとんど抑えようもなかった。なんとかしようとして、両親のほうで役にも立たぬ、見当がいない努力を払うようなことがあつても、それはすっかり失敗して、もちろんこのわたしのほうが完全な勝利

を占めるのだった。それ以来というものの、わたしの鶴の一声が万事家庭を支配して、たいいての幼児がまだ足どりもあぶなつかしい年ごろに、わたしはただ自分の勝手気ままにまかされて、形はともあれ実質的には、おのが意のままにふるまうようになった。

わたしの学校生活の最も古い記憶は、ある霧がかつてみえる英国の村の、だだっ広くしまりのないエリザベス朝風の邸と結びついている。村には、巨大な節くれ立った木がとてもたくさんはえていて、どの家もみな途方もなく古めかしかった。じっさい、この古めかしい村は夢のような、心の和む場所だった。今でさえふと気のせいで、わたしは影深い並み木道の生き生きした冷やかさを感じ、おびたらしい植え込みのかぐわしい香りを吸い、教会の、深みのある、うつろな鐘のひびき——組子細工のゴシック風尖塔が眠るがごとくつまれてゐるほの暗いふんい気の、その静けさに、一時間ごとに、物うく、だしぬけにとどろきわたる教会の鐘の音——に言いようもない楽しさで今さら胸をときめかすことがある。

学校やそれと結びついた事柄をこまごまと思い起こすことは、今ではとても味わえないような、ゆたかなよろこびをわたしに与える。悲惨——ああ、あまりにも生々しい悲惨の淵に沈んだわが身である以上、心弱くもいささかととりとめもない思い出にふけて、たといささやかな、かりそめなもので

あろうと、何か心の救いを求めるのも許されてよいであらう。そのうえ、じつに些細な、それ自体むしろばかげたものでさえあるこの思い出は、のちになってわたしをすっかり暗影の中につづんだ宿命の、その最初のさだかならぬ警告のみとめられる時期と場所ともつながるものとして、わたしにとつてはたまたま何か重要性をおびたものとも思えてくる。こうしたわけで、どうかこの思い出の糸をくりひろげることを許されたい。

この邸は、いまも述べたとおり、古めかしく、その形にまとまりがなかった。敷地は広く、漆喰の上にガラスのカケラを植えた、高い、がっしりしたれんが塀がまわりをとりかこんでいた。この牢獄めいた堡壘がわれわれの世界の果てになっていて、この塀の向こうは週に三度しか目にしなかった——一度は毎土曜日の午後、二人の助教師につきそわれて、どこかまわりの野原を一団となつてしばらく散歩することとが許され、また、日曜日には二度、この村に一つきりの教会の、朝と夕の礼拝にやはり同じ隊伍をとのえて行進するのだった。われわれの学校の校長がこの教会の牧師であつた。おごそかな、ゆっくりした足どりで校長が説教壇に上がってゆく姿を、二階のはるか遠い座席から、わたしはいかに深い驚異と当惑の念をもつていつも見守つたことだらうか。とても落ちついたやさしそうな顔つき、ピカピカ輝かし

い、いかにもお坊様めいて裾長な衣、びったり髪粉をふりかけ、とてもいかめしく、とても大きなかつらをつけたこの尊厳な人物——この人が、つい先ごろしうい顔つきで、嗅ぎたばこくさい着物をきて、木篋を片手に学園の峻厳な掟をつかさどつた人なのであらうか。これこそまったく解きたい、なんと途方もない矛盾と思えたことか！

この重々しい塀の一角に、さらに重々しい門が苦虫をつぶしたような顔で立っていた。この門には鉄の棧が鉸でとりつけてあって、またその頂上にはギザギザの鉄の杭がならんでいた。これを目にして、なんと深い畏怖の念をそそられたことか！ この門は、いま述べた三度の定期的な出入の際でなければ、けつして開かれることはなかった。そしてその際、この門の大きな蝶番のきしる音をきくたびに、われわれはあふれんばかりの神秘——おごそかな所感、もしくは、さらにおごそかな冥想の題材をかぎりなく見いだすのだった。

学校の広い敷地は、形がとどのつていなくて、入り込んだ広い場所があちこちにたくさんあつた。そのうちでも最も大きなものの三つ四つが運動場となつていた。運動場は平坦で、細かな堅い砂利でおおわれていた。今もよくおぼえているが、その中には木立ちもなければベンチもなく、またそれに類するものも、いっさいなかった。もちろんそれは校舎のうしろに位置していて、正面には小さな花壇があり、黄楊や



その他の灌木が植わっていたが、この神聖な場所をわれわれが通りぬけることはめつたになかった——はじめて学校へ登校するときとか、最後に卒業するときとか、あるいはまたおそらく、親や知人が迎えに来て、クリスマスや夏の休暇でわれわれがたのしく家路につく時とかにかぎられていた。

しかし一方校舎とはいえば——またなんと風変わりな古びた建物だったことか！——わたしにとってはまさに魔法の宮殿とも思えた。じっさい、建物はうねうねと曲がりくねって果てしはなく、細かに際限もなく分かれて、どうなっているのかまるで雲をつかむようだった。いつどんな場合にも、いまこの二階建て校舎の一階にいるのやら二階にいるのやら、はつきり言うのが困難なくらいだった。一つの部屋から他の部屋へゆく場合、いつでも階段を三、四段上がったりおりたりしなければならなかった。それにまた、通路は無数に見当もつかぬほど横へ横へと分かれていて、いつのまにか元へもどって行くといったぐあいなので、この建物全体に関するわれわれの最も正確な知識も、「無限」について考える場合と大して異なることもなかった。ここに五年滞在した間に、自分と二十名そこの学友とに割り当てられた小さな寝室は、いったい構内のどんな辺鄙な場所に位置するのやら、はつきり確かめることもわたしには不可能だった。

教室は、この建物の中でも最も大きな——わたしには世界

じゅうでいちばん大きな、と思わずにいられぬような部屋だった。おそろしく長くて幅のせまい、陰うつなほど天井の低い部屋で、先のとがったゴシック風の窓があり、天井は樫材でできていた。ずっと奥の、恐怖の念をそそる一隅には、四角な、八、九フィート四方ぐらいの仕切りがあつて、中にはわれわれの校長たる牧師ブランドビー博士の「勤務時間中」の御座所があつた。これは頑丈にできていて、がっしりした扉がついていたが、たとえ校長先生のおられぬときでも、われわれは、だれしもそんな扉をあけたりするよりは、むしろこんでみな「苛烈な責め苦」によって死ぬことを願ったことであろう。ほかの隅にもやはり同じような仕切りが二つあつて、前述のものほど恐れられてはいなかったものの、やはり大いに畏怖の対象となっていた。その一つは「古典」の助教の講壇であり、他の一つは「英語および数学」の助教の講壇となっていた。また、黒ずんで、古びて、時代がついた無数の腰掛けと机が、かぎりなく不規則に縦横に交差しながら部屋じゅうに散在していた。そしてその上には、手ずれのした書物がやけに積み上げてあり、頭文字、長々と完全に書きしるした姓名、奇怪な図形、その他ナイフで刻んだ苦心の痕が積もりつもって、その昔はまだささやかながら残っていた原形も完全に失われてしまっているくらいだった。水を入れた大きなバケツが部屋の一方の端におかれてあり、とて

つもなく大きな掛け時計がいま一方の端にあった。

この由緒ある学園のがんじょうな塀にかこまれて、わたしは自分の十代のはじめの半分をすごしたのだが、しかしそれは退屈や嫌悪のうちにすごされたものではなかった。内容豊富な幼年時代の頭脳は、物に没頭したり興味をおぼえたりするのに、なにも事多い外界を必要とはしない。見かけは陰うつ単調な学校生活も、もっと成人した青春時代にぜいたく三昧から得た刺激や、またすっかり大人になって罪悪から得た刺激よりも、さらにさらに強烈な刺激にみちみちていたのである。しかし、わたしの最初の精神的発展が非常に異常なもの——「非常に過激なもの」を多分にふくんでいたことは信ぜずにいられない。たいていの人の場合、まだきわめて幼いころの出来事は、成人してのちにまで明確な印象をとどめていることはめったにない。すべては灰色の影であり——はかない、まとまりのない思い出であり——はかない快楽や幻のような苦痛を漠然とかき集めたものにすぎない。ところが、わたしの場合はそうではない。わたしの記憶に、今もカルタゴのメダル<sup>メダル</sup>の刻銘のように、生き生きした、深い、消えがたい線をもつて刻印されているかのように思える印象の数々は、わたしがまだ幼年時代に大人のような強さをもつて感じとったにちがいないのだ。

しかし、じっさいは——常識的な見方からすれば——記憶

するに足るようなものはほとんど何もなかったといえようか。朝の目ざめ、夜ごとの就寝、暗記と朗読、定期的な半休日と散歩、運動場でのけんかや娯楽や陰謀——こんなことが、もうとつくの昔忘れ去った幼い心の魔術によって、さまざまな感覚、内容ゆたかな出来事、種々雑多な情緒、最も熱烈な、最も心をそる興奮などにみちた天地をくりひろげることとなったまでなのである。「おお、たのしかりし時、無知蒙昧なりしころよ！」

じっさい、わたしの気性の激しさ、傲岸さはやがて間もなく、わたしを学友たちの中で目立つ人物とし、またしだいにだいに、しかもおのずからにして、大して年上でもないような者たちすべての上に優越を誇るようにさせてしまったが——ただ一人だけ例外があった。それは、別に親戚でも何でもないのに、わたしと同姓同名の一人の生徒であった。しかし、それは、じつはそれほどおどろくほどのことでもなかった。というのは、貴族の血はひいていたが、わたしの名は世間にありふれたものの一つで、時効から生ずる権利によって、もうずっと昔から庶民たちが誰でもものがものとして用いていたような名だったから。この物語の中ではそれゆえに、わたしは自分をウィリアム・ウィルソンと呼ぶことにしたが、これは本名とは非常にかかけはなれてはいない仮名なのだ。いわゆる学校言葉で「ぼくたちの仲間」をなしている者

たちの中で、このわたしの同姓同名者だけが、学校の勉強でも——運動場の遊戯やけんかでも、あえてわたしと競争しようとし——わたしの主張に対する盲目的な信仰やわたしの意志への服従を拒絶し——じっさい、およそ何につけてもわたしの勝手気ままな命令にじやま立てしようとするのだった。およそ世の中に絶対無上の独裁制というものがありとするならば、少年時代の遊び仲間での、気の弱い者たちに対する餓鬼大将の専横こそまさにそれなのであるが。

ウィルソンの反抗はわたしにとってはこの上ない困惑の種だった。おつにかまえ込んでいる彼を、人前ではわたしはいつとも空威張りした態度であしらっていたが、心中ひそかに自分がこの男をおそれていることを感じ、彼がいかに余裕綽綽とわたしと対等の立場を保っているのは、内実は彼のほうが立ちまさっている証拠だ、わたしのほうは負かされまいとしてたえずあくせくしているのだから、と考えずにはいられなかったが、それゆえにこそ、いつそ彼の反抗はわたしにとって厄介だった。しかし、この優越は——いや、この対等の立場さえ——じつはわたし以外のだからも気づかれてはいなかった。われわれの仲間たちは、どうしたわけかみんな盲目で、このことを疑っている様子さえなかった。事実、彼の競争、その抵抗、とりわけわたしの意向に対する生意気な強情な妨害は、むしろお互い同士の間だけのことで、それ以上に

目立ったものではなかった。なんとかして人に立ちまざりたいというわたしの野心や、またそのおかげでわたしが人に勝つこともできた激しい意欲、そういったものはいずれも彼は持ち合わせないように見えた。わたしに逆らったり、びっくりさせたり、困らせたりしてやりたい、というただ気まぐれな一念からのみ、彼はわたしと張り合っているのだ、とも想像されないことはなかった。もっとも、彼がその迫害、侮辱、もしくは反抗に一種の、この上なく不似合な、たしかに最もありがたくな親愛の態度を交えていることを、わたしはしばしば驚嘆と屈辱と癩癩との入りまじった気持で気づかずにいられぬようなこともあった。そしてわたしは、この奇妙な態度は、この上もない彼の傲慢さが、いかにもおまえをいたわりかばってやるのだぞと言わんばかりの卑劣な様子となつて外に現われているのだ、と想像するほかはなかった。

学校の上級生たちの間に、われわれ二人が兄弟だという印象をひろめてしまったのも、おそらくは、ウィルソンの態度に、いま述べたような、わたしをかばうような様子が見える上に、たまたま名まえは同じだし、またまったく偶然のことながら、二人が同じ日に入学したりしたことでもあろう。上級生たちは、普通下級生たちに関してあまりやかましく詮議立てなどしないものだ。すでに述べたか、でなければ、当然述べておくべきことだが、ウィルソンはわたしの家

族とはほんのこればかりの血のつながりもなかった。しかしたしかに、もしわれわれが兄弟だったとすれば、二人は双生児といわねばならなかった。というのは、これはブランズビー博士の学校を去つてのち偶然知つたことなのだが、わたしの同姓者は一八一三年の一月十九日に生まれている——そしてこれは、ややおどろくべき暗合なのだ、なぜなら、この日はまさにわたしの誕生日なのだから。

ウィルソンの競争とその耐えがたい反抗心のために、わたしはたえず焦慮をおぼえたにもかかわらず、しかもすっかり彼を憎む気持にはどうもなれなかったが、これはなにか妙に思えることも知れない。たしかに、われわれはほとんど毎日のようにけんかをしたが、その際表むきはわたしに勝利の栄冠を与えながら、彼は、ほんとうに勝ちを占めたのは自分のほうだと、なにかの形でわたしにうまく感づかせるのだった。しかしわたしにも自尊心はあり、彼にはまた真正正銘の威厳が存したので、われわれはいつもいわゆる「会えば口をきき合う仲」ともいうべき関係を維持したが、また一方、二人の気質には強く共鳴する点が多く存在して、それがわたしの心に一種の感情——二人がこんな立場にさえなければ、おそらく友情にまで生長したであろうような感情を呼びさますことにもなるのだった。彼に対するわたしのほんとうの感情を定義したり、また説明することさえまったくむずかし

い。それは、種々雑多な、性質を異にした感情が入りまじつたものだった——幾分いらだたしい敵意もあったが、それは憎悪とまではいえなかった。相手の価値を認める気持もまじっていたが、それ以上に尊敬の念のほうが強かった。さらに恐怖心も大いに手つだつており、不安な好奇心もふんだんにまじっていた。だからモラリストに向かつてなら、彼とわたしの間柄はつまり切つても切れぬ仲だったのだ、などとは今さらいうまでもないことであろう。

わたしの彼に対するあらゆる攻撃（大っぴらなものにして、内密なものにして、とにかくその攻撃はひんばんに行なわれたのだが）は、比較的真剣な決然たる攻撃よりも、むしろ擲（な）げんとかいたずら（ただ冗談のような風をよそおいながら苦痛を与える）となりがちだったが、これはたしかに、われわれ二人の間に存する以上のような変則的事情にもとづくものであった。しかしこうした方面でのわたしの努力は、最も巧妙にたくらまれた場合でも、けつしていつも成功するとはかぎらなかった。というのは、世には自分自身鋭い冗談をとばして興じることはあっても、みずからの弱味につけ込まれるようなことは全然なく、絶対に人からは嘲笑（ちやうしやう）されたりしない、おだやかさうで、毅然（ぎぜん）たる態度というものがあるが、わたしの同姓者もまたその性格に多分にそうしたものを持ち合わせていたからである。じっさい彼の弱味といつては、ただ

一つきりしか見いだせなかった。それは何かおそく生来の病からくる身体上の特異性に存していたので、わたしほど万策つきた場合でないかぎり、いかなる敵といえどもそれだけは攻撃を加えるのを遠慮したことであらう——つまり、わたしの競争相手は何か咽喉の器官に欠陥があつて、いつでもその声をとても低いささやき声以上に高くすることがどうしてできないのだった。そこで、だらしくなく、わたしはこの欠陥にできるかぎり乗じることを怠らなかつた。

ウィルソンのほうでもまた負けず劣らずの報復を数多くこころみた。中でも彼の一種のいたずらが言いようもなくわたしを悩ました。こんな些細なことがこんなにわたしを悩ますなどと、最初どうして利巧にも気づいたものか、それはわたしにも解けない謎だったが、とにかくそうと知ってからは、たえずこのいやがらせをやつてのけた。わたしは自分のあまり上品でない姓と、たとえ卑しいとまではいわずとも、しごくありふれた名とをいつもいやに思っていた。この姓名を耳にすると、何か毒でもつき込まれたような思いがした。ところが、わたしがこの学校に着いた当日、第二のウィリアム・ウィルソンもまた学校にはいつてきたので、わたしは彼がこんな姓名を名のるのを腹だたしく思った。そして他人がこの姓名を名のり、それがわたしの名を二重に繰り返される原因ともなり、またたえずこの同姓者がわたしの前に現われ、毎

日毎日の学校の課程において、この厭うべき暗合のために、この男に關することが当然このわたし自身のこととたびたび混同されるだろうと思うと、なおさら自分の姓名がいやになつてくるのだった。

こうして芽ばえたこのいまいましきは、この競争相手とわたしとの間に精神的にも肉体的にもよく似通った点が事ごとに目だつようになるにつけて、ますますつのつてくるのであつた。二人が年までおなじだというおどろくべき事實は、このときまだわたしにはわかつていなかった。しかし、身丈もおなじだし、からだつき顔かたちもふしぎによく似ていることはわたしも気づいていた。それにまた、上級生たちの間にぱつとひろまつた、親戚同士だという噂にもわたしはいらさせられた。一口にいつて、二人が精神的にも肉体的にもその他の事情でも似通っていることを人から言われるのが、何よりもこのわたしを真底からいら立たせた（もつとも、そういういら立ちを用心ぶかくくしてはいたが）。しかし、じつさいは、この二人の共通性は（親戚関係だという噂と、当のウィルソン自身が知っていたこととは別として）われわれの学友たちの取沙汰にされていると信すべき理由もなければ、気づかれていると思えるふしさえ全然なかった。ウィルソン自身はこのことをあらゆる点から気づいているし、またこのわたしにもおとらずしかり見きわめていることはあき



し年月を経た今にして思えば、彼に対して公平を欠くことのないよう、ささやかながら次のことだけは認めておきたい。

それは、この競争相手の忠告が、何の経験もなさそうな、まだ青二才の年ごろにありがちな誤りや愚かさから出た場合は一つとして思い出せないことだ。また、そのいろいろな才能や知恵分別とまではいわずとも、少なくとも彼の倫理感わたししのそれよりはるかに鋭かったし、さらにそのころ、わたしがただあまりにも心の底から憎み、はげしく軽蔑するにすぎなかった意味ありげなあのささやき、そこに盛られていた忠告を、あれほどいつも退けてばかりいなかったら、今わたしはもっと善良な、それゆえにまたもっと幸福な人間となっていたかも知れないのだ。

ともあれ、事実わたしはその厭うべき監視のもとについては極度に落ちつかなくなり、彼の耐えがたい傲慢と思えたものを日ごとにますます公然と憤るようになった。すでに述べたところだが、二人が学友として接した最初の何年かは、彼に対するわたしの気持は、事によればあるいはたやすく友情にまで生長しうるものだった。ところがわたしの学校生活も終わるころの幾月かは、彼のふだんのおしつけがましい態度はたしかに幾分ゆるやかになったのに、ほとんどそれとは逆に、わたしの気持のほうは、多分にはっきりした憎悪の性質をおびるようになった。ある機会に、彼もこのことに気づい

たようだった。そしてそれ以後というものは、わたしを避けたのか、それとも避けるようなふりをするのだった。

わたしの記憶にあやまりがないとすれば、やはり同じころのことだが、あるとき彼とはげしい口論があって、彼も例なく我を忘れて、むしろその性質には似つかわしくない、あからさまな言動を示したことがあった。そのとき彼の口調や態度風貌に、ふと何かあるものを見いだして（あるいは見いだしたような気がして）、わたしは最初ハッとおどろき、やがて非常な興味をおぼえたのだった。というのは、それが、わたしのまだ物心もつかぬころの茫漠とした夢想——まだ物の記憶をふと目の前に浮かび上がらせたからだだった。わたしの心を重たくしたこの気持を説明するにはただ単に、いま自分の目の前に立っているこの人間とはいっか非常に久しい以前から——無限に遠いともいえる過去のある一点から、すでにわたしは知り合っているのだ、という確信を追い払うにはなかなか骨が折れた、とでも言うほかはない。この錯覚は、しかしながら、たちまちにしてまた消え去った。今これについて述べたのも、この奇妙な同姓者とわたしがこの学校で言葉をかかわしたのはじつにこの日が最後であった、と言いたかったからなのである。

無数の細かい区画のあるこの巨大な古い建物には、たがい

に通じ合つた幾つかの大きな部屋があつて、大多数の生徒はそこに寝ることになつてゐた。しかし、(こんな不器用な設計の建物にはやむをえないことだが) いわばこの建物の残りくずともいふべき、狭い片隅<sup>かたぐみ</sup>や引つ込みがたくさんあつた。もちろんただの押し入れ同然のものなので、やっと一人きりしか収容はできなかったが、ブランドビー博士の経済的工夫はこうした場所をもまた寝室に役立ててゐた。そして、こういう小室の一つをウィルソンは占領してゐたのだつた。

ある夜、それはこの学校での第五年目も終わろうとするころで、上に述べた口論のあつた直後のことだが、だれもみなすっかり寝込んでゐるのを見て、わたしは寢床から起き上がると、灯りを手にして、狭苦しい廊下がいくつとなくつづいてゐる建物の中を、自分の寝室からこの競争者の寝室へとひそかに歩んでいった。これまでいつもきまつて失敗ばかりしてはいたが、一度は彼をやつつけてやろうと、ある意地悪いいたずらを久しくたくらんでゐたのだ。そして今、いよいよこの計画をわたしは実行に移すつもりだつた。どれほどこのわたしが悪意を抱いてゐるか、しみじみ思い知らせてやろうと決心した。彼の部屋までいって、灯りに被<sup>おほ</sup>いをかぶせて外におくと、こっそりと中はいつた。一步すすんで、静かな寢息に耳をすませた。彼が眠つてゐることをたしかめると、わたしは引き返して灯りを取り上げ、ふたたびまた寢台に近

づいた。まわりにはびつたりカーテンがひきめぐらされてゐたが、計画を遂行しようとして、わたしはそれをゆっくり静かにひきあげた。とたんに明るい光線が眠つてゐる彼のうえに生き生きとそそがれて、同時にわたしの視線はその顔にとまつた。わたしはじつとながめた。するとただちに、しびれるような、凍りつくような思いがゾツとからだじゅうにしみわたつた。胸は波打つた。膝はよろめいた。何ゆえとも知らぬ、しかも耐えがたい恐怖がわたしの魂をすっかりとらえた。苦しい息をつきながら、わたしはなおいつそう灯りを寝顔に近よせた。これが——いいたい、これがウィリアム・ウィルソンの顔だちなのだろうか。なるほど、たしかに彼の顔だとはわかる。しかしやはり、もしかして彼の顔ではないのでないか、ふとそんな気がして、まるでおこりの発作にとりつかれたようにわたしは身ぶるひした。こんなにわたしをうろたえさすのは、いっさい、この顔だちに何がひそんでゐるからなのだろう? じつと眸<sup>ひとみ</sup>をこらしたが、さまざまのとりとめない思いが群がりよせて、頭はくらめくばかりだつた。起きて元気に動いてゐるとき、彼はこんな顔つきはしてない——たしかに、こんな顔つきではない。思えば名も同じ、姿かっこうも同じ、学校についた日まで同じだつた。さらにわたしの歩きぶり、声、習慣、態度、何から何までただわけもなくしつこく根氣よく彼はまねた。そして、わたしがいま



目にしているのは、ただそうした嘲笑的な模倣をたえず繰り返してきたその結果にすぎないともいうのか、じつさい、そんなことが果たして人の世にありうることだろうか。恐れおのいて、身の毛もよだつ思いで、わたしは灯りを消すとそっと寢室から出て、ただちにこの古い学校の校舎をあとにして、ふたたびまたそこに足をふみ入れることもなかった。

家へ帰って何をするともなく幾月かを遊びくらしのち、わたしはイートン校の学生となった。この短い休養期間は、フランスビー博士の学校での、数々の出来事の記憶を弱め、少なくとも、その出来事を思い出す際の感情に重大な質的変化をもたらすに十分だった。もはやこの事件の生々しき——その悲劇性は存在しない。今やわたしは、自分の五官があのとき果たしたしかだったのか、とまで疑う余裕をもつようになった。このことを思い起こすごとに、人間というもののは、なんとまたばかげたことを信じ込みがちなものだろう、といつもふしぎな思いにかられ、わが家の血統につたわるはげしい想像力を思つては微笑を禁じ得ないのだった。また、あの事件に対するこうした懷疑は、わたしがイートンで送つたような生活では弱められるはずもなかった。イートンへ行ってただちに向こう見ずにとび込んだ無分別な乱行の渦巻きは、すぎ去った昔のいわば泡沫のほかはほとんどすべてを洗い流してしまい、堅実な深刻な印象などすべてみなただちに

のみ込んでしまつて、過去の生活の中でただ正真正銘輕佻浮薄なものだけを記憶にとどめるようになった。

しかしながら、わたしのみじめな放蕩生活——学校の監視の目をうまくのがれながら、校則など物の数ともしなかった放埒をここに逐一に述べ立てたりはしたくない。何一つ得ることもなく過ごされた乱行の三年間は、ただわたしに抜きがたい悪徳の習慣を与え、わたしの身丈をやや異常なまでに伸ばしたにすぎなかった。そのころのこと、卑しむべき放埒の一週間のあとで、わたしは、最もだらしない学生たちからなる小さな集まりを、自分の部屋の秘密の酒宴に招いたことがあった。わたしたちは夜もふけてから集まった。何しろわれわれの乱痴氣騒ぎは、曉方まで根気よくつづけられるはずだったから。酒は氣前よく注がれた。その上、それ以外の、おそろくもっと危険な快楽の数々にも事欠かなかったので、われわれの酔い痴れた遊蕩がまだたけなわのころ、東の空はすでにほのぼのと白みかけてきた。カルタと酒の酔いにすっかり真っ赤にのぼせ上がって、わたしが並みはずれて冒瀆的な乾杯を主張している最中だった。荒々しく、しかしほんの半分ほど部屋の扉がけられて、外から召使のせき込んだ声と呼び立てるのにわたしの注意は突然そらされた。召使の言うには、どうやら非常に急ぎの様子で、だれかが玄関先でわたしに話したいと言っている、とのことだった。